



日本計量生物学会 ニュースレター

1. 巻頭言	- 1	7. 2024 年度統計関連学会連合大会のお知らせ	- 5
2. 試験統計家認定制度について	- 2	8. シリーズ「計量生物学の未来に向けて」	- 5
3. 2023 年度理事会議事録	- 2	9. 学会誌「計量生物学」への投稿のお誘い	- 7
4. 計量生物学講演会報告	- 3	10. 2024 年度学会賞および功労賞候補者推薦の お願い	- 8
5. 2023 年度統計関連学会連合大会報告	- 4		
6. 2024 年度年会・チュートリアルのお知らせ	- 5	11. 編集後記	- 9

1. 巻頭言「データの向こう側」

佐々木 秀雄(佐々木総合研究所)

三十年ほど前の事である。

私は、ある難病への効能取得を目指した開発を進める製薬会社の統計解析担当者であった。その日はプロジェクトリーダーと、試験の医学統計専門家であった大橋靖雄先生と共に治験統括医師を訪問した。打ち合わせ後に統括医師から誘いを受け、診察中の外来を訪れた。

先生は患者さんに我々を紹介し、いつもの運動機能検査を実施された。「この症状が△です。この患者さんは EDSS で△点なので軽度すぎて治験の対象にはなりません。」とのことだった。疾患の初期状態を自分なりに理解した。お礼を述べると、患者さんから「一日も早く良い薬を作ってください」との言葉を頂いた。

次に病棟に案内頂いた。入院中の患者さんの病状は進行し、日常生活動作は相当に低下していた。症状が重過ぎて治験の対象にならないとのことだった。精神障害も生じており会話もあまり成立していない。「今の患者は、私と部下との区別は何とかできています。」との先生の言葉が病状の進行を端的に表した。

次の病棟には、更に病状の進行した患者さんがいらっしやう。全くの寝たきりで、多くのチューブが繋がれており、全身に高度な浮腫が認められた。「この患者の運動機能は完全に廃絶しています。目は開かないし、呼吸のコントロールもできません。」

数十分の体験であった。

発症初期の段階から、その後重症化し、病気がまさに患者さんの命を奪おうとしている状態まで、疾患の進行過程を窺い知る時間だった。

実施中の治験は、プラセボ対照、三年間の投与観察、更に中間解析を行うもので、当時の日本

では画期的に先進的なデザインであった。統計解析を生業とする者として、そのような試験に関与できる喜びに溢れていた。書籍や論文、或いは治験チームとの議論等を通じて、病気の事がある程度は理解しているつもりであった、というのがこの訪問直前までの私であった。しかし、実際の患者さんの状況に対する理解は殆どなく、患者さんの苦悩にまでは意識が向いていなかった自分を、この訪問によって思い知らされた。まさに衝撃であった。この日を境に、臨床試験の『データ』に対する私の意識は大きく変わったのである。そして、『データの向こう側を忘れるな』...事あるごとに、この日の出来事がそっと囁きかけてくれるのだ。

さて、翻って若い統計家や統計担当者についてである。私は、日本科学技術連盟の統計解析専門コース (BioS) で模擬臨床試験を行う実習を 20 年以上担当している。若い統計担当者達の議論や考えに触れる機会が少なくないが、最近気になることがある。それは、彼らがデータを手にしたとき、医療の現場や患者さんの状況をイメージできているのだろうか、という事である。私が仕事に就いた当時は、治験医師への訪問業務に始まり、治験実施計画書・研究会資料・承認申請資料の作成手伝いなど、(善かれ悪しかれ)一通りの業務を経験したものである。勢い医療の現場の状況に触れる機会も多くあった。一方、今は分業化・専門化が進み、統計担当者が医療機関を訪問する機会も殆どない。医療現場から離れたところで医療データを手にし、解析を行っているともいえる実情である。

そこで、若い統計担当者の皆さんへの提案である。医療現場の近くに足を運ぶ機会を持つこ

とを考えてみてはどうだろうか。或いは医療現場に詳しい同僚を通じて、二次体験をするのも良いだろう。そうすることで、期待する効力差を検討する時、或いは主要評価項目の平均的変化を群間で比較する時、データの変化を患者さんの病状の変化と結び付けて考えるようになる

だろう。データの持つ医療上の意味をより深く考察できるようにもなるだろう。是非多くの若い人達に、『データの向こう側』を意識した統計家になっていただきたいと思うのである。

2. 試験統計家認定制度について

大門 貴志, 柴田 大朗, 長谷川 貴大 (試験統計家認定担当理事)

2017年4月に開始しました「試験統計家認定制度」では、臨床研究の統計的デザインと解析・統計家の行動基準に関し深い知識を有し、実践している者を、試験統計家 (trial statistician) として認定します。臨床研究の科学的かつ倫理的な質を高めることで人々が有効かつ安全な医療の恩恵を受けること、併せて計量生物学の進歩と発展を目指しています。規則・細則、Q&A、審査基準等の詳細については、学会 HP をご覧ください。

試験統計家は、臨床研究のデザインと解析の科学的・倫理的側面の責任を負う「責任試験統計家」、臨床研究のデザインと解析に関連する実務を行う「実務試験統計家」の2種類の区分からなり、2023年4月時点で責任試験統計家25名、実務試験統計家74名が認定されています。

今後の予定は以下の通りです。なお、2024年度の認定申請のためには2021年4月～2024年3月の間に開催された認定講習会への参加が必須です。なお、2023年度認定講習会は全日程で終了し

ております。

・2024年3月：2023年度申請分 責任・実務試験統計家認定および更新認定

・2024年5月～7月：2024年度 責任・実務試験統計家認定申請受付

・2024年9月：2024年度 責任・実務試験統計家更新申請受付

すでに試験統計家認定を受けられた方については、更新のために有効期間内(5年間)に30単位が必要です。日本計量生物学会年会・計量生物セミナー・計量生物学講演会については試験統計家認定委員会が発行する単位認定の受講証、それら以外については参加証等の証明書類が認定更新時に必要となりますので保管をお願いいたします。

また、試験統計家認定の更新の申請は、有効期間内または有効期間の満了後1年以内に行ってください。

3. 2023年度理事会議事録

寒水 孝司, 田栗 正隆 (庶務担当理事)

○ 2023年度 第4回対面 (Web) 理事会

日時：2023年9月2日(月) 17:00~19:00

場所：東京理科大学工学部情報工学科寒水研究室個室を本部とする Zoom 会議

出席：服部, 川口, 口羽, 五所, 柴田, 寒水, 大門, 高橋, 田栗, 手良向, 長谷川, 船渡川, 横田, 山本(監事), 安藤(監事)

欠席：大庭, 松井, 松山

定款第35条に従い、定足数を満たしていることを確認した後、定款第34条に従い、服部理事を議長として議案を審議した。

審議事項

第1号議案 入会申し込み

4月1日(土)から8月25日(金)の期間に申し込みのあった29名の入会申し込みについて、全員異議なくこれを承認した。

第2号議案 第34回日本疫学会学術総会プレセミナー共催

第34回日本疫学会学術総会プレセミナーを共催することについて、全員意義なくこれを承認した。

第3号議案 奨励賞の受賞対象範囲の拡大

奨励賞の受賞対象範囲の拡大について、次回の理事会で細則の変更を含めて継続審議することとなった。

第4号議案 論文区分の改定と新設

論文区分の改定と新設について、次回の理事会で継続審議することとなった。

第5号議案 制作印刷会社の変更検討

「計量生物学」第45巻1号から、制作印刷会

社を変更することについて、全員異議なくこれを承認した。

第 6 号議案 計量生物学講演会

10 月 11 日 (水) の計量生物学講演会の開催案について、全員異議なくこれを承認した。

第 7 号議案 計量生物セミナー

12 月 14 日 (水), 15 日 (木) の計量生物セミナーの開催について、全員意義なくこれを承認し、開催に向けて、プログラムの内容と参加費を調整することが確認された。

第 8 号議案 企画委員会 (9 月 5 日(火)) の内容について

WNAR 2024 の日本計量生物学会からの招待セッションと 2024 年度年会の学会賞枠の講演内容を (企画理事を中心に) 検討することについて、全員意義なくこれを承認した。

第 9 号議案 試験統計家認定制度細則の改訂

試験統計家認定制度細則の改訂について、全員意義なくこれを承認した。

報告事項

(1) 庶務関連

退会者、会員種別変更、会員数 (8 月 15 日時点)、宛先不明者、2024 年 9 月 1 日 (日) までの Zoom 契約の更新が報告された。

(2) 会報関連

143 号の発行予定 (2023 年 12 月中旬) が報告

4. 計量生物学講演会報告

川口 淳, 口羽 文, 長谷川 貴大, 横田 勲 (企画担当理事)

【第 1 回】

2023 年 7 月 31 日 (月) 午後、講師として Christina Yap 先生 (The Institute of Cancer Research, UK) をお招きして、「New SPIRIT and CONSORT extensions for early phase dose-finding clinical trials (早期用量設定臨床試験のための SPIRIT および CONSORT の拡張)」をテーマにした計量生物学講演会 (司会: 口羽 文 (神奈川県立保健福祉大学)) を統計数理研究所 医療健康データ科学研究センターとの共催で、現地会場として AP 西新宿にてハイブリッドで開催しました。プログラムは以下の通りでした。

早期用量探索試験のデザインの変遷 (日本語によるイントロダクション): 平川晃弘 (東京医科

された。

(3) 編集関連

43 巻 2 号の発行状況, 44 巻 1 号の印刷状況, 44 巻 2 号と 45 巻 1 号・2 号 (特集論文) の準備状況が報告された。9 月 6 日 (水) の編集委員会の開催予定が報告された。

(4) 会計関連

国際会員の本部送金, 海外からの新規会員に対するクレジットカード対応, 各種予算の執行・見積りの確認状況が報告された。

(5) 企画関連

7 月 31 日 (水) の計量生物学講演会の開催が報告された。

(6) 広報関連

ARO 協議会第 10 回学術集会演題内での広報活動, 2023 年度統計関連学会連合大会のブースでの広報活動 (試験統計家認定制度のポスター) の予定が報告された。

(7) 試験統計家認定関連

試験統計家認定 (2023 年度新規認定スケジュール, 2023 年度更新認定スケジュール) と認定講習会 (2023 年度) の予定が報告された。

(8) 組織関連

定款第 16 条, 第 24 条の一部変更の検討状況が報告された。

歯科大学)

New SPIRIT and CONSORT extensions for early phase dose-finding clinical trials (早期用量設定臨床試験のための SPIRIT および CONSORT の拡張): Christina Yap (The Institute of Cancer Research, UK)

本講演の討論: Christina Yap, 平川晃弘, 佐藤潤 (国立がん研究センター中央病院), 浅川誉 (中外製薬株式会社), 加藤凌輔 (医薬品医療機器総合機構)

参加者は 122 名 (現地参加 15 名, オンライン参加 107 名) でした。SPIRIT と CONSORT を早期の用量設定試験に拡張するプロジェクト DEFINE (DosE FIndiNg Extensions) を主導する

Christina Yap 先生により、用量設定試験のための新しい SPIRIT-DEFINE と CONSORT-DEFINE について紹介されました。また、討論では、産官学を代表する先生方より、用量設定試験のための新しい SPIRIT 声明 と CONSORT 声明について、各立場からの位置付けや期待について、討論が活発に行われました。

本講演会を通じて、早期用量設定臨床試験の計画及び試験結果報告の理解が深まり、今後、試験プロトコル、試験結果の報告のばらつきが抑えられることで、より質の高い試験の実施と結果報告の共有が期待されます。



第 1 回計量生物学講演会
講師 Christina Yap 先生との集合写真

【第 2 回】

2023 年 10 月 11 日 (水) 午後、講師として Tim Friede 先生 (University Medical Center Göttingen) をお招きし、「Bayesian evidence synthesis with applications to combining randomized controlled trials and real world data (Bayes 流メタアナリシスとその応用)」をテーマにした計量生物学講演会 (司会: 服部 聡 (大阪大学)) を開催しました。大阪大学大学院医学系研究科医学統計学教室との共催、現地会場として大阪大学中之島センターと Zoom Webinar のハイブリッド形式で行いました。前半 1 時間半、後半 1 時間半の計 3 時間のショートコースとなりました。

参加者は 129 名 (現地参加 16 名、オンライン参加 113 名) でした。前半は、ベイズ流メタアナリシスの手法、研究間の異質性 (heterogeneity) についての議論を経て、研究数が少ない状況へ応用する方法が紹介されました。また、稀なイベントを対象とするときへの拡張についても紹介されました。後半では、ベイズ流メタアナリシスの方法を、ランダム化比較試験とリアルワールド観察データとの統合へ応用・拡張する方法が紹介されました。特に、サンプルサイズの小さいランダム化比較試験の結果を、外部データを用いて補強する (borrowing information) という観点から解釈が議論されました。ショートコースを通して、多くの応用事例や実装プログラムが紹介されました。また、質疑応答では計画のタイミング、感度解析の重要性、結果の解釈、臨床家とのコミュニケーションなどについて活発な議論が行われました。

本講演会を通じて、ベイズ流メタアナリシス方法の理解が深まり、今後、実際の問題に対する選択肢の 1 つとして活用されていくことが期待されます。



第 2 回計量生物学講演会
Tim Friede 先生と現地参加者

5. 2023 年度統計関連学会連合大会報告

川口 淳, 口羽 文, 長谷川 貴大, 横田 勲 (企画担当理事)

2023 年度統計関連学会連合大会は、2023 年 9 月 3 日 (日) から 7 日 (木) にかけて京都大学および一部オンラインのハイブリッド形式で開催されました。本大会登録者数は 1,054 名で、チュートリアルも含めた大会全体の参加登録者数はのべ 1,380 名となり、前年度 (本大会登録者数 899 名) を上回る盛会となりました。日本計量生物学会からは日本計量生物学会奨励賞受賞者講演、日本計量生物学会シンポジウムの 2 つの企画セッションが行われました。

9 月 6 日 (水) の午後、日本計量生物学会

奨励賞受賞者講演が行われました。今回の奨励賞受賞者である高木佑実氏 (京都大学) からの講演がありました。高木氏の「臨床試験における主要評価項目を評価するための図表示の提案」では、解析結果の提示として、帰無仮説、対立仮説、ベイズ因子、信頼区間を 1 つのグラフに図示する方法が紹介されました。講演後は、活発な質疑で議論が盛り上がりました。受賞者である高木氏の今後のさらなるご活躍を祈念いたします。



日本計量生物学会奨励賞受賞者の高木佑実氏（京都大学）と座長の五所正彦氏（筑波大学）

9月6日（水）の午後、奨励賞受賞者講演に引き続き行われた日本計量生物学会シンポジウム「計量生物学と生態学の新展開」では、日本計量生物学会が発足して40周年を迎えたことを記念した学会誌特集号と連動したシンポジウムを行いました。生態学分野でご活躍されている久保田康裕氏（塩野貴之氏による代理発表）、楠本聞太郎氏、塩野貴之氏、深谷肇一氏、三枝

祐輔氏、小森理氏それぞれから、生態学分野で扱うデータの特徴、それらに対する最先端の取り組みが紹介されました。



日本計量生物学会シンポジウム講演者
左から、オーガナイザー・座長の島津秀康氏（Loughborough University）、塩野貴之氏（琉球大学）、三枝祐輔氏（横浜市立大学）、深谷肇一氏（国立環境研究所）、小森理氏（成蹊大学）、webより楠本聞太郎氏（九州大学、シンク・ネイチャー）

6. 2024 年度年会・チュートリアルのお知らせ

川口 淳, 口羽 文, 長谷川 貴大, 横田 勲（企画担当理事）

2024 年度日本計量生物学会年会およびチュートリアルを、2024 年 5 月 10 日（金）及び 11 日（土）に九州大学医学部 百年講堂（<https://www.med.kyushu-u.ac.jp/100ko-do/>）で開催予定です（応用統計学会と共催）。2024 年度も一般公演として口頭発表及びポスター発表を募集する予定ですので、是非とも講演申し込みをご検討下さいませようよろしくお願いします。

今年度も 40 歳未満の若手の正会員・学生会員を対象に「若手優秀発表賞」の表彰を行う予定です。セッションやチュートリアルの内容、講演及び参加申し込み等の詳細については、後日、学会 HP（<https://www.biometrics.gr.jp/>）及びメーリングリストでご案内します。

7. 2024 年度統計関連学会連合大会のお知らせ

伊藤 陽一, 篠崎 智大（統計関連学会連合大会プログラム委員）

2024 年度統計関連学会連合大会は 2024 年 9 月 1 日（日）～9 月 5 日（木）に開催されます。東京理科大学神楽坂キャンパス（東京都新宿区）およびオンラインのハイブリッドでの開催を検討しております。チュートリアルセッション、

市民講演会、企画セッション、一般演題に加えてコンペティションなどを計画しております。ぜひご予約おきいただき、皆さまの奮ってのご参加をお願いいたします。

8. シリーズ「計量生物学の未来に向けて」

8.1 近づきたいよ 君の理想に

林 賢一（慶應義塾大学 理工学部）

「計量生物学の未来に向けて」という題目で何かを語れるほどの見識をもたないまま、この原稿を依頼される程度には統計学の世界に居続けてしまいました。未来に向けて何をなすべきか、と問われると反射的には「好きなことをやればよいのでは」としか答えられません。なので、過去の点を線で繋ぎ、未来に外挿してそれらしいことを絞り出そうと思います。

私は、心理学に漠然とした憧れを抱いて、大阪大学人間科学部に入学しました。授業を受けると、漠然と思い描いていた心理学像と実際は大きくかけ離れていて、自分には教養として吸収する以上のことはできないと感じるようになりました。その傍らで、心理の調査データを分散分析するとか、因子分析にかけるとかリサーチアシスタントの大学院生が「なんか魔法っぽいもの」を駆使してデータの読み方を教えてくれる機会がありました。そして、この魔法の仕組みを理解したいと、統計学に興味を持ちました。狩野裕先生が担当された必修科目の統計学も衝撃でした。事物が抽象化されて議論に取り込まれ、それらがまた具体的な事象と関連をもつ感じが、数学が（不得意ながら）好きだった自分に合っていました。その後狩野先生の行動計量学研究室に入り、よりきちんと統計学の理論を勉強すべく、同大学大学院基礎工学研究科に進学しました。大学院では、機械学習の理論面について興味を赴くまま論文を読んでいました。ここまで、計量生物学との接点はありません。

転機は、最初の就職が同大学大学院医学系研究科だったことです。研究員として、観察研究のデータ解析を担当することになりました。まともにデータを解析した経験もなく「ロジスティック回帰？教師あり学習でしょ」と結果の出力はできるものの、医学研究者が見たい数字とその意味について満足に理解していない、それ以前にコミュニケーションが成立しない、ということを繰り返す日々でした。数学的命題の証明とは別種の難しさに、無力感から、今まで学んできたことが机上の空論、無用の長物にすら感じることもありました。幸いに、統計解析に強い興味を持った博士課程の医学研究者がおおり、その方とデータ解析の仕方についてやりとりするうちに、医学研究の機微が理解できるようになっていきました。あるとき、その方の解析結果が、指標 *net reclassification improvement* (NRI; Pencina et al., 2011, Stat Med) によると、あるバイオマーカーがモデルの予測性能を有意に改善すると読める場面に遭遇しました。ちょうど、NRIなどの指標が有意差を出しすぎてし

まう問題 (Hilden and Gerds, 2014, Stat Med; Pepe et al., 2015, Stat Biosci など) に興味を持っていた私は、データを慎重に確認し、いま正にその「出しすぎ」の状況が起きていることを突き止めました。ある意味、解析結果に水を差すような指摘でしたが、状況と問題を丁寧に説明することで、議論は平和裡に収束しました。このときの経験が Hayashi and Eguchi (2019, Stat Med) に結実し、実験や反例により批判された NRI などがなぜ問題なのかを統計的性質と結び付けて示すことができました。この記事をご覧になる「王道」を往く方々は、このような学びは早い段階で獲得されると思いますが、邪道の私には一定の年月を費やす必要がありました。

ここまで書いて、計量生物学を背景とし、医学・医療の発展の一翼を担うためには具体と抽象の世界を軽快に行き来できる力が必要なのではないか、と思に至ることができました。そして、二つの世界を繋ぐための「近似」をうまく与える必要があると思います。何を言っているのかわかりにくいような気もしますが、チェビシェフの不等式で有名なチェビシェフのラテン語表記には Chebychev や Tchebycheff などあり、日本語でもチビシヨフやチェブイシェフなどの表記があります (今となっては、ありません、かもしれません)。要は、ある世界の「ことば」を別の世界の「ことば」に移すときには近似が必要で、またそれが一意ではないということです。医学研究における現象を抽象化し、統計的な問題に落とし込む。そしてその結果を、本質を損なわず、理解しやすい形で提示し、議論に至る。これらの行動すべてに「近似」が伴います。それゆえ、研究者の「近似」の仕方が研究の個性や良し悪しに繋がっていると考えられます。研究はひとつのデータ解析、一篇の論文で完結するものではなく、様々な研究者と協働して近似のサイクルを多く回すことによって真実に迫る活動ではないかと思えます。統計モデル自体が現象の近似であることは、いうまでもありません。それゆえ、統計科学に携わる者も統計モデルの妥当性、仮定を含めた適用妥当性、結果の解釈可能性、一般化可能性などの検証が常に求められます。これらの「近似」を弛みなく続けていく努力が、計量生物学の未来を照らすように思われます。私は現在、理工学部数理科学科に在籍しており、応用数学の立場から学生の教育にも従事しています。数学を武器とする学生に、統計科学を礎とした計量生物学に広がる楽しさと、この分野へ貢献できる喜びを伝えられるよう努力して参ります。

8.2 これまでのキャリアとこれから

折原 隼一郎（東京医科大学 医療データサイエンス分野）

私が「計量生物学」を認識したのは、恐らく 2017 年 4 月、製薬企業に入社した時でした。

私は学部・修士のときは数理統計学分野に近い研究室に在籍しており、数式を追う日々を過ごしておりました。学部 3 年生のときに受講したデータ解析の実習や数理統計学の授業が大変面白く、複雑な事象を比較的単純な統計モデルで近似・解釈しようとする試みに、統計学の面白さを初めて見出したことを今でもよく覚えています。

修了後は、前述の通り製薬企業で新薬開発業務に従事しました。修士までの環境とは大きく変わり、多数の人物が関わる臨床試験での業務に最初は大きく戸惑ったのを今でもよく覚えています。また統計解析だけではなく、治験ではデータの品質管理が特に重要であり、CRF 作成・データ仕様書の作成などの業務の重要性を知ることができました。

以上のように学生から社会人にかけて、直接的・間接的に計量生物学に関わる勉強・業務に従事してきましたが、重要なことは主体的にその環境で全力を尽くすことだと考えています。そのため不可欠なことは、主に 2 つあると個人的には感じております。

1 つめは、勉強・仕事内容に興味を持つことではないかと思います。私の場合、学生の頃は自身のバックグラウンドもあり、データの収集方法やデータ仕様の検討に関心を持ったことはなく、就職してから間もなくも何のために統計解析担当が参画するのかが分からずにいました。しかし、それらの仕様次第で続く統計解析の難易度が格段に変わることを体感し、主体的に参画することの重要性を感じました。この事例はどちらかと言うと必要に差し迫ったから、という傾向が強いですが、言いたいことは興味を持って主体的に取り組むことで多くのことを経験でき、自分の今後の糧にできるチャンスが広がるのではないかということです。自分が興味を持って取り組めることに対しては当前ですが、何事にも興味を持つように努力することも重要ではないかと思います。

2 つめは、その環境で師事したい人物を見つけることなのではないかと思います。もちろん、全

てをその人物に近づけようとするのは無理ですしその必要はないと思いますが、その人を尊敬し少しでも近づきたいと思うことは、自身を駆り立てる重要な要素の一つになると考えております。私は幸いなことに、自身が経験した多くの環境で、そういった方に巡り合うことができました。例えば、私の博士課程の指導教官であった、田栗正隆先生がその一人です。前述の通り、私は修士課程まで数理統計学系の研究室に在籍していたこともあり、理論的な結論を導くための数学的な条件に、大きな意味を見出さずにいました。博士論文の一つになっている研究でも同様に考えていたのですが、田栗先生から「その条件の実用上の意味合いをどう考えるのか」、そして「現実的に成立可能なのか」というコメントをもらいました。おそらく、このときはじめて理論的な仮定を、実用上の制約条件と対応させて考えることができませんでした。こういった視点を持てる研究者になりたい、と強く考えさせられるイベントの一つになりました。

今回の執筆のお話をいただいた際に、私のような生物統計家としても、研究者としても志半ばな人間が何を書けば良いのか、正直とても悩みました。事実、バックナンバーを見ると、実績十分な生物統計家・研究者の皆さまの名前が並び、大変恐れ多い気持ちです。そこで、自分の特徴として企業の経験も交えつつ、自身よりも若い研究者・生物統計家の皆さまに向けて、自身の経験を踏まえて、どういうことを考えながらキャリアを歩んできたのかを記載させていただきました。何かしらの糧になってくれると大変幸いです。

最後に、このような執筆の機会をいただいたことに深く感謝いたします。まだ Ph.D を取得してから日が浅く様々なことが勉強の毎日ですが、今後も精進していき、自分のバックグラウンドを活かして、理論と応用の架け橋となるような研究者になっていきたいと強く考えております。そして、今後は自分自身が多少なりとも何かしらのかたちで「計量生物学」に貢献できるような人物になっていきたいと考えております。

9. 学会誌「計量生物学」への投稿のお誘い

五所 正彦（編集担当理事）

本学会雑誌である「計量生物学」に会員からの積極的な投稿を期待しています。会員のためになる、会員相互間の研究交流をより一層促進するた

めの雑誌をめざすため、以下の 5 種類の投稿原稿が設けてあります。

1.原著 (Original Article)

計量生物学分野における諸問題を扱う上で創意工夫をこらし、理論上もしくは応用上価値ある内容を含むもの。

2.総説 (Review)

あるテーマについて過去から最近までの研究状況を解説し、その現状、将来への課題、展望についてまとめたもの。

3.研究速報 (Preliminary Report)

原著ほどまとまっていないがノートとして書き留め、新機軸の潜在的な可能性を宣言するもの。

4.コンサルタント・フォーラム (Consultant's Forum)

会員が現実直面している具体的問題の解決法などに関する質問。編集委員会はこれを受けて、適切な回答例を提示、または討論を行う。なお、質問者(著者)名は掲載時には匿名も可とする。

5. 読者の声 (Letter to the Editor)

雑誌に掲載された記事などに関する質問、反論、意見。

論文投稿となると、「オリジナリティーが要求される」、「日常業務での統計ユーザーにとっては敷居が高い」などを理由に二の足を踏む会員が多いかもしれませんが、上記の「研究速報」、「コンサルタント・フォーラム」は、そのような会員のために設けられた場であり、活発に利用されること

を特に期待しています。いずれの投稿論文も和文・英文のどちらでも構いません。

2004年度から学会に3つの賞が設けられ、その一つである奨励賞は、「日本計量生物学会誌、Biometrics, JABESに掲載された論文の著者(単著でなくても第1著者かそれに準ずる者)で原則として40歳未満の本学会の正会員または学生会員を対象に、毎年1名以上に与えられる賞」です。最近は、履歴書の賞罰欄に「なし」と書くことと公募の際に引け目を感じるくらいです。ここ数年、「計量生物学」に掲載された論文が受賞しており、今後もこの傾向は続くものと見込まれます。特に、上記の条件を満たす方は、ご自身の研究成果の投稿先として「計量生物学」を積極的に検討されてはいかがでしょうか。

また、特に最近の計量生物学の研究に関しては、英語の総説はあっても、日本語で書かれたよい総説・解説が存在しない分野やテーマが多く見受けられます。日本語での総説論文は、多くの会員に有益な情報を提供すると同時に大変貴重なものになりますので、その投稿は大いに歓迎されます。

これまで著者から論文掲載料をいただいてきましたが、学会員が筆頭著者の場合は無料とすることになりました。2013年発行の34巻1号からこれを適用しています。

なお、論文の投稿に際しては、論文の種類を問わず、雑誌「計量生物学」に記載されている投稿規程をご参照ください。会員諸氏の意欲的な論文投稿を心よりお待ちしております。

10. 2024年度日本計量生物学会賞および功労賞候補者推薦のお願い

松山 裕, 松井 茂之 (学会賞担当理事)

一般社団法人日本計量生物学会は、日本計量生物学会賞、功労賞および奨励賞の3つの賞を授与しています。この中で、日本計量生物学会賞と功労賞の受賞候補者は、会員の皆様により推薦いただき学会賞選定委員会にて受賞者を推薦し、日本計量生物学会賞受賞者は理事会の承認により、また功労賞受賞者は理事会での協議のうえ社員総会の承認により決定されます。

今年度も、会員の皆様に日本計量生物学会賞および功労賞の推薦をお願いする時期となりました。自薦、他薦いずれも受け付けますので、宜しくご推薦お願い申し上げます。

日本計量生物学会賞および功労賞の対象者は以下の通りです。

日本計量生物学会賞：顕著な研究成果を発表した学会員に対する賞

功労賞：本学会への貢献が大きかった学会員に対する賞

下記の様式により日本計量生物学会賞、功労賞いずれも学会賞選定委員会宛、あるいは学会賞担当理事に郵送または電子メールにてお送りください。受賞者の発表と表彰は5月の会員総会で行います。いずれの賞もニュースレターなどで受賞理由を公表いたします(推薦者は非公表です)。

推薦書の様式：A4版1枚に、日本計量生物学会賞または功労賞推薦書と14ポイントで書き、本文は10.5ポイントで以下の内容をご記入下さい。資料の添付等は自由です。

- 1) 被推薦者氏名、所属、略歴、連絡先(住所、電話、e-mail)
- 2) 推薦理由(略歴含む)

- 3) 推薦期日
- 4) 推薦者氏名 (複数の場合は全員)
- 5) 推薦者 (複数の場合は代表者) の所属および連絡先 (住所, 電話, e-mail)

推薦締め切り期日: 2024年1月31日 (必着)
推薦書送付先: 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-6 能楽書林ビル5階
(財) 統計情報研究開発センター内

11. 編集後記

昨年の統計関連学会連合大会の際に実施された日本計量生物学会40周年記念シンポジウム「計量生物学の発展と今後の展開」と連動して、計量生物学において総説論文が発表されています。臨床試験・疫学・農学・水産学・環境・生態学の6

つの分野について順次発表が進んでいますが、各分野の最近の発展を把握するととても良い機会になっていると思います。会員の皆様、是非ご一読ください。

(冬の深まる新宿より)

日本計量生物学会会報第143号
2023年12月12日発行

発行者: 日本計量生物学会
発行責任者: 服部聡 編集者: 船渡川伊久子, 田栗正隆